

主日礼拝説教「あなたに語りかける声」

日本基督教団石神井教会 2017年1月15日

【旧約聖書日課】エゼキエル書 2章1節～3章4節

2¹彼はわたしに言われた。「人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる。」²彼がわたしに語り始めたとき、霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた。わたしは語りかける者に耳を傾けた。³主は言われた。「人の子よ、わたしはあなたを、イスラエルの人々、わたしに逆らった叛逆の民に遣わす。彼らは、その先祖たちと同様わたしに背いて、今日この目に至っている。⁴心ならずで、強情な人々のもとに、わたしはあなたを遣わす。彼らに言いなさい、主なる神はこう言われる。と。⁵彼らが聞き入れようと、また、叛逆の家なのだから拒もうとも、彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るであろう。⁶人の子よ、あなたはあざみと茨に押しつけられ、蠍の上に座らされても、彼らを恐れてはならない。またその言葉を恐れてはならない。彼らが叛逆の家だからといって、彼らの言葉を恐れ、彼らの前にたじろいではない。⁷たとえ彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたはわたしの言葉を語らなければならない。彼らは叛逆の家なのだ。⁸人の子よ、わたしがあなたに語ることを聞きなさい。あなたは叛逆の家のように背いてはならない。口を開いて、わたしが与えるものを食べなさい。」⁹わたしが見ていると、手がわたしに差し伸べられており、その手に巻物があるではないか。¹⁰彼がそれをわたしの前に開くと、表にも裏にも文字が記されていた。それは哀歌と、呻きと、嘆きの言葉であった。

3¹彼はわたしに言われた。「人の子よ、目の前にあるものを食べなさい。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に語りなさい。」²わたしが口を開くと、主はこの巻物をわたしに食べさせて、³言われた。「人の子よ、わたしが与えるこの巻物を胃袋に入れ、腹を満たせ。」わたしがそれを食べると、それは蜜のように口に甘かった。

⁴主はわたしに言われた。「人の子よ、イスラエルの家に行き、わたしの言葉を彼らに語りなさい。……」

【使徒書日課】ヨハネの黙示録 10章8～11節

⁸すると、天から聞こえたあの声が、再びわたしに語りかけて、こう言った。「さあ行って、海と地の上に立っている天使の手にある、開かれた巻物を受け取れ。」⁹そこで、天使のところへ行き、「その小さな巻物をください」と言った。すると、天使はわたしに言った。「受け取って、食べてしまえ。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い。」¹⁰わたしは、その小さな巻物を天使の手から受け取って、食べてしまった。それは、口には蜜のように甘かったが、食べると、わたしの腹は苦くなった。¹¹すると、わたしにこう語りかける声が聞こえた。「あなたは、多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて、再び預言しなければならない。」

【福音書日課】マタイによる福音書 4章18～25節

¹⁸イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。¹⁹イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。²⁰二人はすぐに網を捨てて従った。²¹そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、彼らをお呼びになった。²²この二人もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った。

²³イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。²⁴そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへ、いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。

²⁵こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った。

聞こえていますか？

今、ご一緒に歌った讃美歌の収められている『讃美歌 21』は、わたしたちの属する日本基督教団が今から 20 年前の 1997 年に出版した讃美歌集です。その当時、わたしはまだ神学生でしたが、その年に出席奉仕することになっていた教会では、4 月からすぐに、礼拝で用いる讃美歌集がこの『讃美歌 21』に全面的に切り替えられましたので、わたしも、この初版本を手にするようになりました。その後、神学校を卒業してすぐに赴任した大分の教会では部分的に用いるだけでしたが、12 年間仕えた前任地の教会では、原則として主日礼拝では必ず『讃美歌 21』を用いてきました。わたしの個人的な歴史から言うならば、青年時代には元の『讃美歌』（1954 年版）で信仰を育まれてきた者ですが、牧師としてはむしろ、『讃美歌 21』を用いて礼拝を整えるための試行錯誤を重ねてきたと言えます。昨年春に石神井教会に仕えるようになってから、あらためて、皆さんとどのようにこの『讃美歌 21』を用いて礼拝をつくっていけるかと、試行錯誤を続けさせていただいているわけですが、わたしは、皆さんに、ぜひ、この『讃美歌 21』で新しく採用された讃美歌をたくさん、知っていただきたいと願っているのです。それは、単に新しいものにチャレンジする、ということではありません。元の『讃美歌』にはなかった、あるいはあまり焦点が当てられていなかった事柄が、少なからず、この讃美歌集で取り上げられ、採用されているからです。

もともと、わたしが実際に礼拝のために選ばせていただく讃美歌は、わたしの好みによって偏りがあるかもしれません。今ご一緒に歌った讃美歌「朝ごとに主は」（『讃美歌 21』472 番）も、そういう意味では、わたしが好んで選んできた讃美歌の一つです。ではありますが、ぜひ、この讃美歌を皆さんにも親しんでいただきたいと思うのです。ことに、この歌詞を味わっていただきたいのです。

「朝ごとに主は目を覚まさせ、私の耳に語りかける。主のみ言葉で迎える朝、私と共に主はおられる」。

今日、日曜日の教会にお集まりになられた皆さんは、この日の朝、どのような目覚めをされたのでしょうか。目覚まし時計を鳴らしてでしょうか。そのようなものは不要で、決まった時間に自然に目覚めるという方もいらっしゃるでしょう。あるいは、家族のだれかに起こされなければ目が覚めなかった、という方もいらっしゃるかもしれない。けれども、どのような目覚めをされたとしても、皆さんは、主のお呼びかけをいただいて、主のモーニングコールで、新しい目覚めを与えられ、呼び出されて、教会へと導かれてこられたのです。

そう、教会学校の子どもたちには、いつも申します。「イエスさまが、皆さんの枕元に来て、起こしてくれたから、教会に来られたんだよ」と。けれども、わたしは相手が子どもだから、そういう言い方をするものではありません。皆さんにも同じことを申し上げたいと思う。皆さんにも、今朝、神が「目覚めよ、起きて、立ち上がりなさい」と呼びかけてくださって、「わたしのもとに来なさい」と導いてくださったのです。だからこそ、今、ここにいらっしゃる。日曜日の教会に集められ、神の御前で共に礼拝にあずかる者にされているのです。

イエスに従う人々の中で

わたしは、何か、神秘的なことを皆さんに押しつけようとしているわけではありません。あるいは、夢や幻で見ることを誇張して言おうとしているわけでもないのです。「朝ごとに主は、わたしの目を覚まさせてくださる。語りかけてくださる。ご自分のもとに呼び寄せてくださる。」

「いいえ、わたしは自分で目を覚まして、自分自身の計画で活動を始めて、思考を働かせて、そうした準備を万端整えて、それで神の御前に進み出てまいりました」、とわたしたちは考えているところがあるかもしれませんが、そうではないのです。本当はそうではない。

わたしたちは、本当は、自分自身で目覚めているのではない。本当は、自分自身の計画で活動を始められているわけではない。自分自身の考えで物事を判断した上で、神の御前に進み出てきたわけではない。本当は、命の主である神に、毎日に新しい目覚めをお与えいただいているのです。神に、この日一日のご計画をいただき、またわたしたち一人ひとりの人生の計画をいただき、そのご計画のうちに、わたしたちは道を備えていただいている。そして、わたしたち自身の思いによらずに、神の御前に進み出る者としていただき、呼び集められた者として、共に礼拝にあずからせていただいているのです。

福音書は、主イエスに従い始めた弟子たちの姿を伝えています。四人の漁師たち、ペトロと呼ばれるシモンと兄弟アンデレ、ゼバダイの子ヤコブと兄弟ヨハネ。

もちろん、この四人だけでなく、多くの者が弟子として主イエスに従いました。わたしたちがよく知っているのはいわゆる十二弟子ですが、十二人だけでなく多くの者が弟子として主イエスに従ったはずで、それだけでなく、弟子と呼ばれることのなかったような人々、《群衆》として伝えられるような人々もまた、主イエスに従ったのだと、今日の福音書は、言うのです。

主イエスのもとに集まり、従った人々は、さまざまでした。教会もそうです。教会は、洗礼を受けて主イエスの弟子として後に続く者の集まりだと言うこともできますが、実際の教会の営みには、洗礼を受けた者だけでなく、まだ洗礼を受けていられなくても加わられるのです。あるいは、教会の営みの広がりや、信者である教会員のみを対象にしているわけではありません。むしろ、教会の営みは、牧師だけでなく信者である教会員の皆さんをその働きの担い手として、外へ外へと広がっていくもの、と言うべきでしょう。わたしが神学生時代に出席奉仕していた横浜の教会では、主日の礼拝の中で必ず、「横浜市民 350 万人の救いのために」との祈りがささげられていましたが、わたしたちも同じように、「練馬区民 70 万人のために」との祈りをささげるべきでしょう。

ただ、そうだとすると、わたしたちすでに洗礼を受けて主イエスの弟子として教会に集められている者と、それ以外の人たちとの間に、何の違いもないということではありません。むしろ、違いがある。主イエスに、なぜ従ったか、というところに違いがある。弟子となる者は、ただ、主が眼差しを向けてくださり、お呼びかけくださったと、そのことを信じて、そのことのゆえに、従ったのです。

《御言葉》をこそ慕い求めて

福音書が伝える群衆、主イエスに従った大勢の群衆は、その点で、弟子となった者たちと区別されています。この「群衆」と呼ばれる人たちは、確かに主イエスの教えを聞いて、心動かされたのでしょうか。主イエスの福音宣教を、喜んで聞いたのに違いありません。あるいは、主イエスの癒しの御業に感動したのです。ぜひ、その御業に自分もあずかりたいと思いました。自分だけでなく、自分の家族や友にもその御業にあずかってほしいと願い、主イエスのもとに連れて行くことさえしました。主イエスは自分たちの期待に応えてくれる方だったのです。そして、主イエスは、その人たちのことをお受け入れくださり、癒されたのです。

そのような主イエスのお働きを、わたしたちは、大切なことだと知っています。今は、主イエスに従う教会にも託された働きであるということ、わたしたちは知っています。諸教会と共に、この主イエスのお働きを受け継ぎ、その御業に仕えさせていただくのが、教会の使命の一つです。

けれども、主イエスは、ご自分を求めてくる人々を良しとしてお受け入れくださり、ご自分に従うことをお許しになられただけではなかった。ご自分の教えに心動かされ、福音を喜ぶ人々が集まってくることをもって、それだけで良しとはされなかった。むしろ、主イエスは、ご自分を求めようとしなかった者をお選びになられたのです。ご自分の教えをまだ聞いてもいないような者、ご自分を必要としていないような者をお選びになられた。

弟子たちです。四人の漁師たちをはじめとする、弟子たちです。

彼らは、自分の仕事をしていました。自分で計画を立て、自分の能力を信じて、自分自身の働きに忙しく過ごしていたのです。彼らには、主イエスは必要なかったのです。いいえ、必要かどうかを考える暇もなかった、と言うべきかもしれません。いずれにしても、彼らは、主イエスを求めてはいなかった。そのような者たちを、主イエスはご覧になられたのです。目を向けられたのです。そして、お呼びになられたのです。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」。

彼らが、網を捨てて主イエスに従ったのは、その主イエスの呼びかける声に、気がついたからです。主の呼びかける御声に気がついて、その御言葉を植え付けられてしまったからです。それ以来、彼らは、主の弟子と呼ばれる歩み続けました。主の御声を聞き続ける歩み、主の御言葉を聞き入れ、心の内に反芻し、自分のものにしてしまうまで味わい尽くす歩みが、始まったのです。

そのような弟子としての歩みは幸いであると、福音書はわたしたちに告げているのです。主が、お語りくださる。神が、天からお語りくださる。そのことに気づかされた者として「聖書」を開くとき、御言葉は蜜のように甘く口に広がると、預言者エゼキエルも黙示録のヨハネも、証しました。御言葉を自ら手に取り、口にすると、蜜のように甘く思える。たとえ、その御言葉に苦みが含まれていても、です。その御言葉こそが、わたしたちの語るべき言葉を作りだしてくれるのです。わたしたちを、主の御言葉を語り出す者として、立ち上がらせ、遣わす。そのために、主は、わたしたちを弟子としてお呼び寄せになられたのです。